



それでは、今日の出演者の皆様をご紹介します。
きます。

俳優の近藤芳正さん。

近藤さん

よろしくお願いします。

海平アナ

料理研究家の大原千鶴さん。

大原さん

よろしくお願いします。

海平アナ

そして松井孝治京都市長です。

松井市長

よろしくお願いします。

海平アナ

もうね、すごく和やかな雰囲気になっていますけれども、この番組では、今日は京都の魅力について、様々な角度から大いに語り合っていたいただきたいと思えますので、よろしくお願いいたします。

さて、松井市長、このお二人とはもともと面識はおありなんですか？

松井市長

割と最近かもしれません。

もちろん画面ではね、お二人ともずっと私は勝手に馴染んでましたけど。

近藤さん

僕は映画、『事実無根』の

松井市長

“じじむこ”の。

近藤さん

縮めて“じじむこ”という。

最初は SNS です。SNS でつぶやいてくださったんです。見たいですつって。で、ぜひ見てくださって。

ナレーション

2021 年京都へ移住された俳優の近藤芳正さん。

近藤さん

京都はね、呼ばれたら住むところ。

僕は、これ呼ばれてるよな。

ナレーション

京都の料亭で生まれた料理研究家の大原千鶴さん。

大原さん

京料理はね、野菜料理やと思ってます。

ナレーション

そして、松井孝治京都市長が京都愛について熱く語り、京都の魅力を広く発信するトーク番組。

松井市長

京都って、磁力がある人が多いんですよ。

近藤さん

京都に来た時に、皆さん変態だと思って。

ここなら、自分の変態性を出してもいいんだと。

松井市長

これ、ここだけ見た人誤解するね。

ナレーション

今から、はじまりおすえ。

海平アナ

皆さんこんにちは。進行役の海平なごみです。

松井市長

で、見に行ったんですよ。

松井市長

それで何か舞台挨拶的なものでしたっけ？

近藤さん

はい、そうです。

松井市長

ちょっとお邪魔して、京都シネマでご挨拶して。
それから「そのうち cafe SNC」というその舞台のカフェに行ったんですよ。その映画を見た後に。

海平アナ

その時のお互いの印象っていうのはどんな感じだったんでしょうか？

松井市長

僕はですね、主人公がすごく自然で。
そのままの感じで。だってあの時カウンター立っておられましたよね。

近藤さん

あ、そうですね。カフェのマスターの役だったので、
カフェのマスターの風情でちょっと厨房の方に入らせてもらって。

松井市長

私の課題は、いかに居酒屋に一緒に行くかっていう時間を取っていただいて。

近藤さん

行きたいですね。

松井市長

行きたいですよ。是非是非。

海平アナ

松井市長、大原さんとは？

松井市長

大原さんはね、審議会の委員やっていただいていますし、
20年以上前に「草喰なかひがし」さんに行ったときに、
たまたまお見かけしたことがあるんですよ。

大原さん

「草喰なかひがし」ができた頃にね。

松井市長

その覚えはあるんですけど、ちゃんとお会いしたのは
市長になって市民対話みたいところで、審議会のメンバーの方々と対談させていただいたり、京町家での音楽の会みたいところで一緒にしたり。

大原さん

市長さんも本当に文化芸術にね、すごい多趣味でいらっしゃるからね。

松井市長

いやとんでもない、とんでもないです。お二人にそう言われるの恥ずかしくて。

大原さん

いやいや本当すごいなと思います。

松井市長

でも本当にね、いつもテレビのまんまの自然体ですごく奥行きが深くいらっしゃって、もう勉強になります。

海平アナ

いろんなお料理も発信してらっしゃいますけど、松井市長もお料理はされるんですか？

松井市長

いいえ、しません。全くしません。僕は外食派なんです。私、宿屋の倅なんで、ずっと賄いで育ってきた人間なんですよ。

大原さん

え、そうなんですか？

松井市長

だから、母親に手料理とか言うと、
「何甘えてんのあんたって。私は女将やから、あんたが板場さんの賄いのご飯を食べるのはもう宿命や」って言われて。
食べるのは好きなんで、時間ができたら料理をできればいいんですけど、今はちょっと時間があつたら自分の好きなお店に行ってお飯食べる方が。

大原さん

いいお店がたくさんありますしね。

松井市長

私も市役所の近くなんで。
時々近所の人から大原さんが歩いてはるの見かけたって聞いたり。

大原さん

そうです。自転車乗ってね、買い物行ってますから。

松井市長

私も近くをうろうろしてます。玉の湯さんとか。

大原さん

私も近くをうろうろしてますからね。玉の湯さん、パーンってやってね。

海平アナ

もうなんか今日は大いに盛り上がりそうな予感がします。



海平アナ

それでは早速一つ目のテーマ参りましょう。

「世界に誇る京料理 和食は始末の心から」
京料理、和食というと大原さん。

大原さん

私なんかね、お料理屋さんで育ってますけど、自分自身は本当に家庭料理ばかりをやっているんで、
そんなん言われたらこそばゆい感じはするんですけど。

ど。

でも、ずっと若い頃から、お料理屋さんで育ってますので、周りのお料理屋さんの皆さん、大将の方たちとやっぱり仲良くさせてもらってました。
京都の料理業界の人ってめちゃくちゃ仲がいいんですよ。
お互いのお料理屋さんに行って厨房入って、ちょっと何かつまんで、これ何でできてるんやとかね、そんなことを普通にできるような関係性なんですよ。

近藤さん

意外です。

大原さん

隣同士は戦わなあかんと思ってはったでしよ。

近藤さん

そうです。口聞いちゃいけないと。

大原さん

でもそうじゃないんですよ。
それがすごい良いところで、その業界全体とかお料理業界を盛り上げて。
京野菜もそうですけども、ずっとこう形作ってブランディングをやっていくっていうのがすごくて、みんな仲がいいからできることっていうのがあるんですけど。
それ以外にいろんな方とお話してて、京料理って何やろうっていうときにですね、京料理はね、野菜料理やと思ってます。
本当に山に囲まれているから、冬寒くて、夏暑いから美味しいお野菜が育つところ。
今でもずっと固有種でね、自分とこで種取って作り続けてはるお野菜もありますから、もう本当に特別なものがある。
それをどう上手に美味しく仕上げるかっていうのが大事なテーマで。
おうちも代々こう昔からの商売のおうちが多いからね、呉服関係とか、あと職人さんもあるから、大体家でお仕事してはるおうちが多いでしょ。
奥さんはもう一緒にお商売手伝うてはるから、それこそ近所のお豆腐屋さん行ってパッと買うてきて、それ

をみんなで賄いでさっさと食べるとか、そういう文化や
ったんですね。

だからわりと京料理って難しく思うかもしれませんが
けど、家庭のおばんざいみたいなのは
すごく合理的で簡単な料理が多いんですよ。

海平アナ

今の文化、歴史を聞いて、近藤さんはどんな風を感じ
られました？

近藤さん

初めて伺いました。だから本当に京都といっても、
僕はまだたかだか5年ですので、まだ小学生にも上が
れてない、よちよち歩きで、ようやく言葉が喋れるぐ
らいなので、語る資格はないと思ってるんですけど、
京都の中華があったりとか、洋食文化があったりとか、
意外とあっさりからこってりまでいろいろ幅広くあ
ったりとか、いろんなパン屋のカフェがあったりとか、
肉もすごく食べる方が多いです。

今またその昔からの流れみたいな野菜料理って言わ
れると確かにそうだなあという。

海平アナ

京料理というと2022年に国の登録無形文化財にも
登録されて、すごくそれも話題になりましたよね。

松井市長

話題になりました。錚々たる料亭、どこか海外の機関
の星が付いている、そういうところもちろん素晴ら
しい。

ちょっとカウンターがある小料理屋さんとか、居酒屋
さんっていうようなお店とかも含めて、ほんまにあち
こちに美味しい店がある。

意外とチャチャッと作らはるよね。

海平アナ

手軽、簡単と仰ってましたね。

松井市長

早いですよね。

大原さん

そうですね。早い。チャチャッと。

松井市長

喋りながらチャチャチャってやってパッと出てくる。
もちろんお出汁とかはちゃんとしてはるし、仕事は
してはるんやと思うんですけど。それがすごいいいで
すね。

僕らどうしても会食っていうか、パーティーみたいな
のが多いんですよ。ろくに食べられないんですよ。
料理出されるときはちょっと食べたりしてるとご挨拶
来られたりして、途中でやめて、そうしてるうちに
次の会場にいつてくださと言われて。

でも、それが終わった時に、自分の好きなお店で夜九
時過ぎでもまだ入って大丈夫っていうところに行っ
たりすると、すごいホッとするんです。

大原さん

癒やされますね。

松井市長

好きなものを単品でね。

そういうお店がすごい多いので、とっても素敵ですよ
ね、その文化がね。

学生街もあるんで、大学の周辺は今でも食堂みたいな
ところがあるしね。

そういうところはまた違った美味しさですよ。

大原さん

すごいボリュームでね。

松井市長

京都やからちょっと量が少なくって、あっさりしてる
というところばかりじゃないんですよ。

大原さん

そうなんですよ。本当。面白いですよ。

松井市長

ラーメンなんかむしろ濃厚ですよ。

海平アナ

テーマにね、先ほどあった「始末の心から」というのはどういった意味合いがあるんですか？

大原さん

そうですね。始末っていったらケチケチしてるみたい
に思われるかもしれないんですけど。

その素材自体、料理で言うと食材ですけど、大根の皮
なんかでも、ゴミって感じじゃなくて、やっぱそれ
をおしゃれにできることがかっこいいという感じ
かな。

大根の皮剥いて「ちょっとこれキンピラ作ったし、
食べて」って出したら、ああ、おいしいやんっていう
驚きがあったり、そこに旨味があったり、そういうの
をセンスよくうまく采配できるっていう、そのテクニ
ックやと私は思ってます。

海平アナ

それは家庭だけじゃなくてお店でも？

大原さん

そうそう。それがまたホッとした味につながるし、こ
れができるのがやっぱオーナーさんがやっておられ
るお店やからで、人に言われたレシピで、人に言われ
たマニュアルでははるところには絶対無いものなん
ですよ。

松井市長

なるほど。

大原さん

だからそれが一番心がほぐれるっていうか、そういう
もんやと思ってます。

松井市長

納得ですね。家族経営っていうか、オーナーさんがそ
れぞれの店、喫茶店でもね、そういう小料理屋さんで
もね、それが多い。

逆に大都会ではちょっとそれは少ないですね。

近藤さん

ないですね。

始末っていい言葉だなと思って。始まりがあって末が
あって。

大原さん

そうですね。

近藤さん

生きることにもつながってるんだなと。

大原さん

私がちっちゃい時によく父母に言われたのが、ひとつ
の草にも、一つの花にも命があると思って扱いなさい
ってすごく言われて。

京都の人ってちょっと控えめなので、こうキラキラさ
して外車乗ってブイブイ来るのがかっこ悪いと思う
というのかね、そういう文化があるので控えめにして
おかんっていうね。

近藤さん

よくわかります。すごくわかりやすいです。

海平アナ

本当にいろんなお店があって、京都はホッとする場所
もっていう話出てましたけど、近藤さんはお気に入り
のお店とかもたくさんできましたか？

近藤さん

いろいろとね、師匠である角野卓造さん、ひと月のう
ちに一週間以上京都にいらっしゃるということで、住
めばいいのになって、「住まない、永遠の観光客でいるん
だ」って仰ってましたけど。

松井市長

それはもう暮らすように旅をして。

近藤さん

ええ。あの方にいろいろとおいしいお店を教わってま
すね。

お食事もですけど、やっぱお店の方との相性みた
いなのがあったりしますよね。

ちょっと肩の力を抜いてあがれるようなお店で、小言
の一つや二つ言っても許されるぐらいの、それでかっ

かっかっかと笑いながら、また明日への元気をいただけるような、そういうようなお店はいくつか行かさせてもらってますね。

お店の方との会話を楽しみながら、お料理もいただくというようなそういうお店によく行かせていただいていますね。

海平アナ

京都らしいなって思われるのはどういうところですか？

お店行かれて。

近藤さん

意外と多様性があるなという。多様性というのは、京都住む前は、和食文化が中心で、それ以外はあんまりないんじゃないかみたいな。

もちろんね、ラーメンとかもあったりするんですけど、単純にご飯ばかりという方が多いんだろうなと思ってたんですけども。

パンの消費もすごく多かったりとか、カフェも多かったりとか、そしてお店も大宮とか西院の方に行くと、若い人たちが自分のやりたい料理を、無国籍に近い形で中華とイタリアンを組み合わせたものをやったりとか、立ちながら飲むだけけれども、そこでケーキも出していたりとか、座る場所もあったりとか。

いろんな自分たちのやりたいことをやれる、誰の遠慮もなしにやれるのが、これは東京にはあんまりないという、やってみてダメだったら撤退すればいいじゃないって。

東京だとやるのが大変な労力なので、一度やったものはなかなか引き下がらなかつたりするんですけど、京都の場合は本当に自分のやりたいことを一回やって、それがどう受け入れられるか、すごく多様性があるなと思います。

海平アナ

もう松井市長もね、いろんなところ行かれてると思うんですけど。

松井市長

あんまり行くとね、暇なんちゃうかっていう。忙しいって、断られる割には。

でも時間空いてるのは大体夜九時以降、普通の時間帯、会食の時間帯の後の時間になる。

いや、そんなに暇だったら寝ろって言われるんですよ。でも精神の健康って大事。

大原さん

そうですね、一回ほぐさないと。

松井市長

ご飯食べ損なったら、だいたいカウンターですね。私はカウンターでご主人とか女将さんが一人とか、お手伝いさんが一人ぐらいはるような、そんなぐらいのお店の方が好きで。

海平アナ

そういうお気に入りの店がいくつもある？

松井市長

こんな仕事しながらでも、そういういい店はちょっとずつ知り合いに聞いて、月に1軒ぐらいでも、そこ行ってみたいなど。

ただ基本は同じようなところに行ってますね。また行ってるのかみたいな。

海平アナ

ほんといろんな話が出てきますけど、大原さん改めて京都の和食、京料理っていうのは、どういったところにあると思いますか？一番の魅力っていうのは。

大原さん

そうですね。でも今のお話して出たように、伝統的なイメージあると思うんですけど、常にちゃんと革新してるから、ずっと飽きられずに新しく存在できるっていうところが大きいと思うので、結構みんな堅苦しくなくて、変わらないように上手に変えていってる。

それで業界全体の魅力、お料理って本当に作るのも楽しいし、来ていただくのも楽しいし、そんな中で京都の奥ゆかしさとか、あるいは美味しさみたいなものがメンタルとして世界中に広がっていったんじゃないですか。

その良さをみんなが理解して続けていけたらいいなっていう風に思ってますね。

海平アナ

先ほど、お野菜っておっしゃったように、
京都の土壌ですとか季節感みたいなものはあります
よね。

大原さん

そうですね。

それを続けてくださっている農家さんがいらっしや
って初めてできることなので、農家さんも続けてもら
わなあかんし、それこそ呉服屋さんも続けてもらわな
あかんし、器屋さんも続けてもらわなあかんし。
やっぱり続けてもらわなあかん職種がたくさんある
んですよね。

松井市長

そうですね。今農家さんの話しはったけど、僕らが
好きな店は結構井戸水を使ったはるんですよね。

だからお出汁とかもすごい優しい。お豆腐なんかもそ
うですよね。

よく行くバーも、やっぱりすごい水にこだわって。井
戸水でウイスキーを湯で割ってぬるくして、ウイスキ
ーのぬる爛みみたいなお湯割りですけど、そういうのを
飲んでみたら、今までは他のウイスキー飲んでたけど、
全然違う。

大原さん

味が変わりますよね。

松井市長

そういうのがいろんな随所で、水と土が育てるお野菜
のうま味とか、住んでみるとしみじみといいですよ。
東京の人って成長する、お店沢山出すっていう、それ
が美学みたいなところあるけど、やっぱ京都はそういう
ことじゃなくて、自分なりの続けていくこと、あるいは
工夫をするっていうこととか、さっきの始末ってい
う言葉に繋がるんですけど。

生き方が日本の他の大都市の成長思考とか量的な拡
大とか、競争するというようなものとは違って、ここ
ところはまた違っていいっていうね。

自分たちの独自のやり方があるし、どう工夫しながら
続けていくかみたいな、そこは全体としていいところ
やなと思いますね。



海平アナ

では、続いてのテーマにまいりましょう。

「京都は呼ばれて住むところ」

気になる言葉なんですけれども、こちら近藤さんの。

近藤さん

はい、そうですね。5年前に妻と出会いまして、結婚
することになりまして、鎌倉の方で一緒に住むのがい
いんじゃないかなと思ってたんですけども、どうや
ら彼女、あんまり「うーん、そうやな」みたいな。
どういうことかなとか思って。

大原さん

京都人や

近藤さん

あと時代劇でお世話になっていて、そういうご縁もあ
って。

そしたら、『親父キャンプ飯』って YouTube のドラマ
もあって、これも京都の制作会社だって言って、うわ
あ、結構いっぱい仕事来てるなあというのと。

僕と妻のご縁を結んでくれたのは中井貴一さんなん
ですけども、中井貴一さんから「近ちゃんは京都に
住む」って風に言われて、どういうことなのかという、
はてなマークを思い浮かべながらも、結髪さんに「ど
うですかね、京都に住むっていうのが少しよぎってる
自分もいるんですけど」って言ったら、先輩の女優さ
んが結髪さんにおっしゃったことがあって。

亡くなられた江波杏子さんがすごく京都のことがお
好きなんです。

結髪さんが「じゃあ、お住みになればいいじゃないで
すか。」と言ったら、江波さんが「いや、京都はね、呼
ばれないと住んじゃいけない。呼ばれたら住むところ。
私はまだ呼ばれてないから住めない」とおっしゃった
って、僕はこれ呼ばれてるよなって。

大原さん

確かに！

近藤さん

僕は呼ばれてるんじゃないかって。

それで、妻に「鎌倉はやめようと思って、京都に住もうと思って」って言ったら、めちゃめちゃ喜んでくれた。

じゃあもう京都に住みますって、住むようになって5年なんですけれどもね。

本当に不思議なご縁があつて。

家内とのご縁も『決算！忠臣蔵』っていう映画があつて、そこで進藤源四郎さんという役を演じさせていだいて、大石内蔵助さんの親戚なんですけれども、その進藤源四郎さんから「進藤」という名字をいただいで、家内のお母様の実家が進藤を名乗らせていただいでいるので。

大原さん

役どころと実際の末裔の方がご縁ができた？すごい！

松井市長

それは呼ばれてるんですよ。

海平アナ

変わりました？京都の印象は。

近藤さん

そうですね。京都は仕事をしに行ってますから、(撮影所のある)太秦中心で。

ある種やんちゃで、ある種優しい、温かいみたいな。右京区の人＝京都人っていうイメージがあったんですよ、勝手に。

太秦の人たちは特に撮影するのにも、「こうしよう、こうしよう、こうしようって、おらー」みたいな。

「早く立って動いて、セリフ喋って、早く次行くで」みたいな感じだったんで、割と気がすごく優しいんだけど、言葉は荒いような、そんなイメージがずっとあったんだけど、住んで、また左京区に行くと、左京区の方でまた違う京都の方たちがいて、ご自分の趣味をすごく持っていらっやって、他と何か交流するよりもご自分のやりたいことをやりたいという。

松井市長

面白いね。

大原さん

左京区と北区は似てる感じするけども、東山もまた違って。

近藤さん

そうですね。

松井市長

伏見とか全然また違うんですよ。

伏見の独自の結束力があります。

ここら辺(中京区)も違うんですよ。

大原さん

また違いますよね。

近藤さん

多種多様なんだなということが、住んですごくよくわかりました。

ちょっと路地に入っただけで雰囲気変わったりとか。

松井市長

あります、あります。

海平アナ

市内でも区民性みたいなものがあるっていうのは面白い話でしたね。

松井市長

区民だけじゃないですよ。

例えば醍醐と伏見のね、大手筋あたり、桃山御陵の辺りと、また西の方、全然違うし。

本当にいろんなものが混在してますよね。

近藤さん

もう面白いですね。こんな幅が広いとは。

それこそ一見さんお断りのイメージが勝手にあつて。

そこから右京区で洗礼されて、今住んでまた違う京都の方々と出会えて、人間って多種多様で面白いなあ。

これを受け入れていくのが京都の街の面白さだなど、僕は住み始めて思っ

松井市長

でも京都人が気づかない、もう今や京都人かもしれないけれど、観察の深さとか、僕らもドキッとしたりしますね、今の話聞いて。

そう言われたらそうかもと。

大原さん

そうやってまだ5年いらっしゃるのに、エリア別の人間観察ができてはるのがすごい面白いと思いますね。

松井市長

やっぱり呼ばれてきはったから。

つながってたんじゃないですか？大昔いはったとかあるかもしれないし。

近藤さん

実はうちの先祖が大谷祖廟に入ってたことが最近わかったんですよ。

大原さん

えー そうなんですか！

松井市長

やっぱり呼ばれてたんですよ。

近藤さん

それも不思議なご縁で。名古屋なんでね、出身が。名古屋の親戚とずっと途絶えてたんですけども、その親戚とつながることができて、そしてお話を聞いたら、いや、先祖はね大谷祖廟にいるんだよと。

大原さん

面白いね。

呼ばれてきはったわ。

松井市長

それで5年で京都人も気づかないようなことまで含めてね。

海平アナ

やっぱり、近藤さんに伺いたいのは、映画の街京都っていうところを伺いたいと思うんですが。

近藤さん

そうですね。本当に太秦には松竹と東映と両方あって、単純に東映の方は『暴れん坊将軍』とか『水戸黄門』とかで、松竹は『鬼平犯科帳』とか『剣客商売』とか、ちょっと人情味のある、こっちはけれん味のあるみたいな違いがあつて。

で、スタッフもお互いに交流もなかったんですけど、最近東映も松竹も一緒になろうよって言って、今はお互いが交流しあつて、互い協力していこうよって、時代劇がね、なんとか根絶やせないよって頑張ろうってということで、一致団結しようということで、いろいろと今やっていて、実は皆さん役者さんでいろいろな方が出入りされて、それこそ最近ですと『国宝』も京都で撮られて、いろいろな方が自分の好きな京都、このお店に必ず行くとか、この神社に行くとか、いろいろなルーティンを持ってらっしゃる方がめちゃめちゃ多いんですよ。

京都のことは第二のふるさと的に思っ

てらっしゃる方もめっちゃ多いんで、本当に京都愛を持ってる役者さんがいっぱいいる。京都に住んで思うのは、こういう役者さんが京都へ来て撮影してるよっていうことを意外と知らない方が多いんで、その役者さんと交えて京都のいいところ、面白いところとか聞きながら、前に市長も太秦を真ん中にみたいなことをおっしゃってくれてましたけれども、どんどんどんどん京都の街の人たちと触れ合うみたいな形をできれば、またお互いに切磋琢磨できるんじゃないかななんて勝手には思っ

大原さん

時代祭みたいなね、それ面白いですね！

近藤さん

本当に京都のこと愛してる役者さんが多いんで、それが京都の市民の方たちに伝わってないことがすごく今もったいないなど。

松井市長

そうなんです！それがもったいないんですよ。

松井市長

こんな撮影所があってね、役者さんが出入りしてはってというのを意外と京都の人は知らない、特に若い子は知らないんで、どんな人たちが映画を作ったはるのかとか、あるいはいろんな撮影で映像作品を作らはんのかとか、子供たちにもっと触れさせてあげたい。

近藤さん

そうなんですよね。触れ合う機会が欲しいなと思いますね。

海平アナ

今提案してくださいましたけどいかがですか？

松井市長

いや、面白い。時代劇祭り。

「MUSIC AWARDS JAPAN」って去年やらはったじゃないですか。

あの後、皆さんがおっしゃるには、みんな打ち上げをしはって、東京ではない盛り上がり。

東京ではこんな人たちがこんな時間まで残らへんっていうのを、みんな残って朝まで盛り上がりはったっていう。

近藤さん

そうなんです。

ホテルいきなりというよりも、せっかくだからお酒飲めない人も美味しいお食事だったら付き合いたいなっておっしゃってくれるもので、そこでお酒飲める人も飲まない人もって盛り上がりたりするんですよ。

松井市長

京都だからこそ起こる盛り上がりなんですよ。

そういうみんなが共通の京都愛みたいな持ったはるのをどううまいこと結びつけるかっていうのは、僕らの知恵の出どころかもしれないね、これからね。

近藤さん

住んでみて思ったんですけど、京都の方たちは俳優に

対してつかず離れずに距離を置いてくださる。

最初に「どうもいつも見てます」とかってお声がけをしてくださって、でもそこからは一切入ってこない。放っておかれる感じがすごく心地いいんですね。

東京だといなかったことになって、透明人間状態になるんですよ。京都だと存在をちゃんと認めてくださって、でも、お好きなようにプライベートは聞きませんから、みたいな感じで、だから役者にとって居やすいです。

松井市長

大阪やったらもっと「何してんの！」とか

近藤さん

「写真、写真！」とか。

松井市長

それぞれのね、良い悪いではなく、個性が。

海平アナ

京都で楽しく、居心地よく暮らすには、こう移住してこられてどういうところがコツとして大事なかなとか思われるんですか？

近藤さん

昔『笑っていいとも！』でタモリさんがおっしゃっていた言葉が記憶に残っていて、「人間本来は変態なんだと。その変態性を隠すか出すかだけで、人間本来全員変態なんだ」と、おっしゃっていて。

なるほどなと思っている部分もあって、京都来た時に、あ、皆さん変態だと思って。

大原さん

ああ～、確かに。

近藤さん

僕も変態になりたくて。

東京だと変態性を抑えないと生きていけないところもあったりする。

ここだったら自分の変態性を出してもいいんだと。

松井市長

これね、ここだけ見た人誤解する。

大原さん

そういう変な意味じゃなくて！

近藤さん

その自分の趣味とか、そういうことに対して没頭して
る。

経済のこととか考えずに、やりたいことをやるって
いう。

松井市長

要するに何かこだわってる人のことをあえて変態っ
て言って、変態同士の絆みたいなのが。

これ、ものすごい褒め言葉なんですよ。

近藤さん

そうなんですよ。あえての正しい変態になりたいなっ
て。

松井市長

“変態道”

いやだからそういう人多いんですよね。

大原さん

うん、多いです。

松井市長

割とそれぞれの中のこだわりがあって、そのこだわ
りが人によって違うんですよ。

お互い「あいつ変態やからな、おもしろいよ」って
いうような言い方で、こだわってる人について、割とリス
ペクトするといった言い方で。

大原さん

寛容ですね。本当。

海平アナ

じゃあ今日集まっていたいている皆さんも変態と
いうことでよろしいですか？

大原さん

はい。

近藤さん

正しい変態。

松井市長

変態道。家元みたいな。

大原さん

そうですね。でも居場所があるんですよ。

近藤さん

この居場所いいよっていう。

京都の街と人がおっしゃってくれるんですよ。

あとなぜ京都がこんなに好きなんだろうと思ったの
は、神社仏閣が多いのか、鴨川からの空気が祈りの空
気なんですかね。

すごく気持ちいいんですよ空気が。

さーっと入ってくる空気がすごく気持ちよくて。

それを何か悩み事があった時に深呼吸できるという
この街の空気の豊かさ、これは東京に行くとき空気が薄
く感じて息苦しくなっちゃうんだけど、京都はそれが
その空気が美味しいんですよ。

そこは自分にとってありがたくて、何かあったらちょ
っと鴨川の方を歩いたりとかして、深呼吸をして帰っ
たりとか。

御所なんかも歩いて気持ちいい。

大原さん

そうですね。気持ちいい。

市長さんもこの間おっしゃってた
街中に透明な水の川が流れていることをおっしゃっ
てましたよね。

松井市長

鴨川もものすごく綺麗やし、高瀬川は水の量が少ない
し、疏水の問題もあるからあれやけど、まあでも透明
ですよ。

もっと言うと例えば四条河原町で地下から上がって
くるところも、階段のところ、地下水がチョロチョロ

流れてたりして、そういうのですら透明なんですよ。だからやっぱりね、水がこの街を育んでるような気がしますね。

僕らそれはなかなか言語化できてないけど、そう言われてみたらそうやな。

鴨川下って、時々鴨川で山が見えて、そこちょっと歩いたり、車で走るだけでもね、気分が変わるといふか、京都人が当たり前と感じていることが、そうやってずっと名古屋とか東京で過ごされてきた近藤さんから見たら、いかにちょっと特別なものなのかね。

海平アナ

だからこそ守っていかないといけないものなんだなっていう風にも気づかされました。



ナレーション

会場となっている「らくたび京町家」は昭和7年に棟上げされた築90年を超える京町家。

奥に建つ蔵と共に近代京町家の代表事例として国指定・登録有形文化財／市指定・景観重要建造物に指定されています。

山村さん

大塀造ですので、基本的には完全住居型で、ここでは商売はせずに、あくまでおもてなしをする空間ということですので、かなりいろいろなところにこだわりがありまして、これらの石はほぼ鴨川から。

一同

ええ！

山村さん

この吊り灯籠も4つ輪っかの中に電線が入っていて、電線を見せない工夫がされています。

来た方が趣きを感じていただけるように細部までこだわってつくられています。

山村さん

こちらがこの町家の1番の自慢の空間でして、茶室なんですけれど、大山崎町にあります国宝の「待庵（妙

喜庵）」を手本に、できるだけ待庵を真似てつくられますので、天井とかは完全に待庵のスタイルを踏襲してつくられています。

お茶をされている方は喜んでいただける空間になっています。

大原さん

街中とは思えないですよ、ここにいたらね。

山村さん

我々もここで月2回お茶の稽古をしています。

松井市長

さっきお庭の手入れをしているときもいろいろなことを忘れられるとおっしゃって、そういう夢中になれる時間っていいですよ。

近藤さん

お聞きした話だと宴会とかで盛り上がっている中で、ちょっとお茶しませんか？と2～3人でお茶を入れて、空間が変わって人が少なくなることで生まれる会話があると。

社交の場としてのお茶の魅力を感じています。



海平アナ

それでは最後のトークテーマはこちらです。

「京都のこれからについて」

少しね、これまでのお話の中でもそういった話出てきましたが、松井市長、どんなふうに考えられているのでしょうか。

松井市長

僕はね、京都ってね、いろんな磁力がある人が多いような気がするんですよ。

それぞれがそれぞれにこだわりがあって、大原さんみたいな人がいはって、そのファンの人がいはる。

そのスタイル、生き方のスタイルみたいなのを共感しはる人が、実は京都以外にもたくさんいはる。

そういう磁力のある人がね、京都は多いと思う。

こんな磁力のある人たちが集まっている街だという

ことを、ちゃんと外側の人にも知ってもらって、そのお互いの磁力ある人たちをうまく組み合わせたり、あるいは次の時代の若い人たちに、例えば素晴らしい職人さんがいるんだけど、後継ぎに困ってはるようなところもあるわけですよ。

それを場合によっては日本中、あるいは世界の外国の人でもいいので、その磁力に引き寄せられる人たちをちゃんと京都に来てもらって、その京都の磁力をちゃんと次に伝えていく。

あるいはすごい面白い変態同士がいっぱい住んでいる、こだわりの尖った人たちも含めて、こだわってるけどその尖った人同士が喧嘩せえへんっていう文化やと思うんですよ。

あんまり過剰に介入したり、論争して、お前と俺の生き方違うなってことはこの街では起こらへんですよ、なんか知らんけど。

それをうまいこと外側の人に来てくださって、磁力と磁力がまた組み合わせさって新しいものが生まれるような。

そういう京都が京都らしいな。

そういう京都を続け、育むかっていうのが。

海平アナ

近藤さん、いかがですか？

近藤さん

俳優やってる者としては京都を愛してる人たちがいっぱいいるので、こんなに愛してる人たちがいるよっていうことを伝えていきたいなと思ったりすると、東京行くときは仕事、経済が中心で、皆さん仕事をしに行ってる人たちが多くんで当然ですけども、京都の方たちは、僕はやっぱり生活が中心だなと思っていて。

松井市長

ああ、なるほど。

近藤さん

その中に仕事があるという、それが一番大事にされていることが僕はすごく救われているので、生活を大事にするということを、その生活というのは友達との語りだったりとか、美味しいもの食べたりとか、ご親

戚との付き合いだったりとか、家庭だったりとか、何の関係ないお友達とか、そういう営みに本当の幸せがあるような気もしてて。

それを六十過ぎて京都来て、幸せな気分らせていただいているので、どんどんどんどんそっちに行きたいなと思った。

あと、京都来て学ばせてもらったのは、先代・先々代がいて、それをつないでいくんだ、それをどういうふうにしていくのか、そこからどうつないでいくんだって、これは生きていることに直接つながることだなと思っていて。

生まれて亡くなるという、その時に誰から頂いたものをどうやって繋いでいくんだということを京都の街から教わっている。

京都のこのオリジナルの考え方を大事にしてほしいなとは思いますがね。

大原さん

料理人してもそれいろんな工芸にしても、いろんな方が作ることに對して、集中して作ると、精神がすごく鍛えられるというか、ととのう。

その上に美しいものを作ってる自負みたいなものもあって。

すごく技術も上がってて、いつも自分が前に向いて生きていける環境やと思うんですよ。

すごくいい環境なんだけど、それがちゃんとお金につながらないと、やっぱり続けられないじゃないですか。だから、やっぱそのブランディングというか、ちゃんとその人たちが食べられたり、生きていけたり、息子さん、息子さんじゃなくてもそのお弟子さんがそれをつないでいきたいって思う環境に、世の中をもっと引っ張って行って、そういう人たちの考えがもっと広まっていったらええなって、いつも思うんですけど。

松井市長

そうですね。確かにととのう街ですよ。この街はね。

海平アナ

さて、お話いろいろ盛り上がったんですけども、お時間となってしまいました。

皆さんのお話を通して、どんな風を感じられたか松井

市長、お願いします。

松井市長

お二方がモヤモヤと思っていたことを言語化してくれはって、近藤さんはやっぱり京都に呼ばれて、人の生活と仕事の話であるとかですね、経済だけではないというお話であるとか、あるいは大原さんから心がととのう街であるというような、話をおっしゃっていただいて、それぞれ私はもう腑に落ちるっていうか、改めて自分の中の京都観を見つめ直す機会を頂いたように思います。

本当に京都の魅力、あるいはこれからについていっぱいヒントを頂いてありがとうございました。

海平アナ

京都の良さがたくさん見つけて、
もっともっと好きになれた時間だったので、
またお話できたらなというふうに思います。今日はありがとうございました。